

はじめに ―― たくさんの愛に支えられて

生まれて28年と半年で私の体は自由を失いました。

2004年7月16日朝、勤務先の保育園へと向かう途中に交通事故に遭ったのです。その事故で首の骨を折り、頸髄を損傷した私は、体に重い障害を負いました。胸から下が完全に麻痺し、右手の握力も完全に失いました。左手にたった2キログラムの握力が残っただけです。そして、車椅子で生活することを余儀なくされたのです。

それは、新しい自分の道が切り開かれ、これから…といった矢先の事故でした。

生涯生きがいとなる仕事を持ちたいと考えていた私は、結婚前、公立の幼稚園教諭として働いていました。しかし、通勤距離の問題から結婚を機に退職。そこで私が考えたのは、保育士資格の取得でした。小学校教諭と幼稚園教諭の免許しか持っていなかった私は、需要の高い保育士資格を取得することで、また新たな可能性や道が広がるのではないかと考えたからです。

そして、AO入試で短期大学へと入学。乳幼児教育の視野は広がり、私と同じ年代で乳幼児教育を志す素晴らしい仲間との出会いにも恵まれました。2004年4月、群馬県邑楽町立中央保育園へと勤務し始めました。かわいい子どもたちに温かな雰囲気のある保育園…。全てが新鮮そのものです。

そんな希望と期待に満ち溢れた春からわずか3か月半後の7月16日の朝、悲劇が起こったのです。

あの日から今年で5年が経ちました。2度にわたる大きな手術に厳しいリハビリ、退院してからの車椅子生活…。そして、出産…。

絶望と幸せの入り混じったこの5年は長くもあり、とても短かったように思います。

義母が入院中に言った言葉があります。

「あっこちゃん。生きていて本当によかったよ。死んでしまったら終わり。灰になってしまうだけ。どんなになっても生きていけば、必ず道は開けるのだから」

「はい」

私は無表情に答えたのを覚えています。しかし、心の中では、

「それはそうかもしれないけれど、こんな体では、死んだほうがまし。死んだほうがラク」との想いも駆け巡っていました。

「命があってよかった」という義母の言葉が、今になって胸に染みます。むずかしい理屈なしに、「人間は命があるだけで誰でも価値があるのだ」と思えるようになりました。

そして、その命は愛なくして輝くことはできません。私は、この5年間で多くの方がたのたくさんの愛に支えられたおかげで、命に輝きを取り戻したように思っています。

そして、そんな私のお腹に2005年秋、小さな命が宿りました。お母さんになる…。それは、私がずっと夢見ていたことです。たくさんのリスクを抱えながらも2006年5月2日、娘を無事に出産しました。こんな私を母として選んでくれた娘。こんな私を母として認めてくれた娘…。娘の誕生は感動と喜びに溢れました。妊娠、出産、育児を通して娘が私を大きく変えてくれたように思います。

振り返ると、自分の身に起こった現実を認められず、自分の足で歩いている人がただただ羨ましくてしかたなかった私が、いつのまにか車椅子での生活を自然なものとして、母として前向きに生きていることにこの本の執筆を通して気がつきました。

現在、相次ぐ自殺や殺傷事件など、簡単に命を傷つけ、奪ってしまう事件が多くあります。心が痛みます。お互いがおもいやり、支えあい、いたわりあう、そんな愛溢れる社会になることを願ってこの本を書きました。

若輩者の私が綴った本ですが、人間の持つ命、そして愛の素晴らしさを少しでも感じていただけたら、今こうして生かされていることに改めて大きな意味を感じ、幸せに思います。

2009年9月

又野 亜希子